



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	まち歩き観光における住民の役割パフォーマンスに関する研究：長崎さるくを事例として〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	金, 明柱
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	甲第14419号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81253
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Kim_Myeongju_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）

氏名：金 明 柱

学位論文題名

まち歩き観光における住民の役割パフォーマンスに関する研究 ー長崎さるくを事例としてー

本研究は、地域観光振興策として実施された長崎市のまち歩き観光事業「長崎さるく」を事例に、役割パフォーマンスとしてのホスト・ゲスト論を理論的視座としながら、社交の場としてまち歩き観光を活用する住民たちの実践と彼らの主体性について論じることを目的としている。具体的には、長崎さるくの経緯及び行政と住民にとっての長崎さるくの意味を明らかにし、パフォーマンス論と社交論の視点から、ガイドと参加者間のコミュニケーションのあり方を分析し、まち歩き観光の社会的・空間的条件と住民同士の役割パフォーマンスが持つ意義を考察した。以下、章立てに沿って概要を記す。

序章では、本研究の問題の所在、目的、研究課題、理論的視座、研究方法及び調査過程、論文の構成、調査地の概要について述べた。本研究の研究課題は大要以下の4点である。①長崎さるくがどういう文脈で生まれてきたのか、そして行政は何に期待し、行政と住民はいかなる関係性を保ちながら、長崎さるくに取り組んでいたのかを明らかにすること。②地域住民の実践に着目し、さるくガイドにとってのガイド活動の意味及び観光におけるガイドの意義について探ること。③長崎さるくにおけるガイドと参加者の会話のあり方を捉えながら、ホスト・ゲストの役割を往復する「常連」の役割について明らかにすること。④長崎さるくにおける社会的・空間的条件を明らかにし、長崎さるくにおける住民同士の役割パフォーマンスが持つ意義を明らかにすることである。そのための研究方法として本研究では、参与観察等の一般的なフィールドワークに加え、特にオートエスノグラフィーの手法を導入し、主観的経験に再帰的な解釈を加えながら現場のリアリティを捉えた点で特徴を持つことを説明した。

第1章では、まち歩き観光や住民参加型観光まちづくりの先進事例として捉えられてきた長崎さるく博'06の成立背景から経緯、行政側による評価について明らかにした。長崎さるくは住民ガイドとまちを歩くという手法で実施され、観光において地域の主体性や自立が問われていた社会的な課題と合致するものであった。ただし、住民主体という長崎さるくの戦略は、地域全体を巻き込みながら多くの住民の参加を可能にした一方で、その意味が行政に都合良く解釈されていた点や地域イベントに参加しない住民が排除されうるといった問題点を潜在させていたことについても指摘した。

第2章では、行政の期待とは別の側面に焦点をあて、住民ガイドにとってのガイド活動の特徴と精神的報酬について明らかにすることを試みた。ガイドとしての当事者性や正統性の希薄さに特徴があることを指摘し、そこから、長崎さるくはガイドと参加者が目的性のない会話や交流を楽しむ場であることを論じた。また長崎さるくを軸にしたガイドたちの様々な人間関係を捉えることを通じて、ガイドにとって観光客を案内してやりがいを得ること以上に、新たな出会いに繋がるきっかけとしてのガイド活動の意義の重要性を明らかにした。

第3章では、さるくガイドと住民参加者間の「案内する／案内してもらう」関係は、なぜ、どのように成立しているのかという問題意識から、住民同士がガイドと参加者両方の立場でまち歩き観光の場を作り上げる状況を両者のコミュニケーションの様式から検討した。その結果、ガイドと参加者たちは常に会話する態勢を整えており、偶然の出会いを題材にした会話を楽しんでいること、また、まち歩き観光においては「ホスト／ゲスト」の役割が、人々のアイデンティティとして固定されたものではなく、状況に応じて選択されているのであり、そういった役割パフォーマンスを通じて住民たちは、身近な場所であるまちで自ら非日常的な経験を生み出していることが明らかになった。

第4章では、長崎さるくにおいて経済的な自立運営の仕組みが欠如していたことから、当初の趣旨とは異なるかたちで、集客や経済的効果がまち歩き観光事業をけん引する最も重要な目標になっていったことを指摘し、その過程で生じた行政と住民間の葛藤を明らかにした。第1章で述べた長崎さるくという場を最初に作り出した行政の貢献は認めながら、第2章と第3章で描いた住民の主体的な実践をサポートしきれない行政事業としての限界と課題を指摘した。

結論では、4つの研究課題に沿って第1章から第4章の議論を理論的視座に従って総合考察し、本研究の意義と今後の課題について論じた。

まず、研究課題①については、第1章と第4章の考察から、長崎さるくにおいて謳われた住民主体とは、草の根的なものというよりは、社会的な要請と行政の戦略による手法であったことを指摘した。住民が金銭的な報酬を求めず、人々との交流や活動の場を得ることで精神的充足を得る住民主体の理想的な参加のあり方は、初期においては行政と住民双方にとって利害が合致するものであった。しかし、内外の環境変化により経済的な効果が低下するなか、事業の継続性を図るため話題性や収益性を重視していく行政側と、活動の場の維持を望む住民間で葛藤が生じていった経緯を解明し、長崎さるくの変容過程について明らかにした。

研究課題②については、第2章の事例分析を通じ、ガイドとしての当事者性や正統性が希薄なさるくガイドの性質が、むしろホスト／ゲスト間における歓待を「する／受ける」といった役割パフォーマンスを柔軟にさせていることを論じた。またさるくガイドは、観光の場に集まった人々がフラットな関係性の中で、偶発的な話題について語り合えるきっかけをつくる存在であり、「誤配」を生み出す存在として特徴的であることを示した。

研究課題③については、第3章の事例を再検討しながら、「常連」の役割パフォーマンスの意義について論じた。長崎さるくにおいて常連は、まち歩き観光の楽しみ方を身につけ、その場を盛り上げる役割を果たしている。一参加者であると同時に、ガイドの実践に共感し、時にはガイドに準ずる振る舞いを見せる常連は、状況に応じてホスト／ゲストの役割を往復する両義的な存在であるという点で特徴を持つ。ただし、Goffmanの論じた「さくら」（戦略的に仕込まれた役割）とは異なり、常連の存在は個人的な興味関心、まち歩き観光の場を盛り上げたいという意思からなる「自発的なもの」であり、ガイドと参加者の関係性はパフォーマンスチームとして、ともに「ゲストをつくる」存在であることに意義があると主張した。

研究課題④については、まち歩き観光において偶然の出会いが生じる異種混交的空間としての特徴、ガイドと参加者、参加者同士の社会的関係性について論じた。まち歩き観光は目的地にたどり着くという「目的」よりも、道中の「過程」を重視する活動であり、ガイドと参加者にとって「ホスト／ゲストであること」自体は目的ではなく、重要なのは、まち歩き観光の場を作り上げ、人々と社交をする楽しい時を過ごすことである。また住民同士が社会的な関係性を維持することが、ホスト／ゲストを往復する自由なパフォーマンスを可能にしている。このような長崎さるくにおける住民の役割パフォーマンスは、観光を社交の場として活用する実践であり、「出会いの欲求」に基づいた住民たちの主体性が、行政制度や市場経済の枠を超えまち歩き観光というかたちとして表れているのだと結論づけた。